

かかみがはらの石器

石で作られた原始の道具

編集 各務原市埋蔵文化財調査センター
発行 各務原市教育委員会
TEL (058) 383-1123
平成18年2月

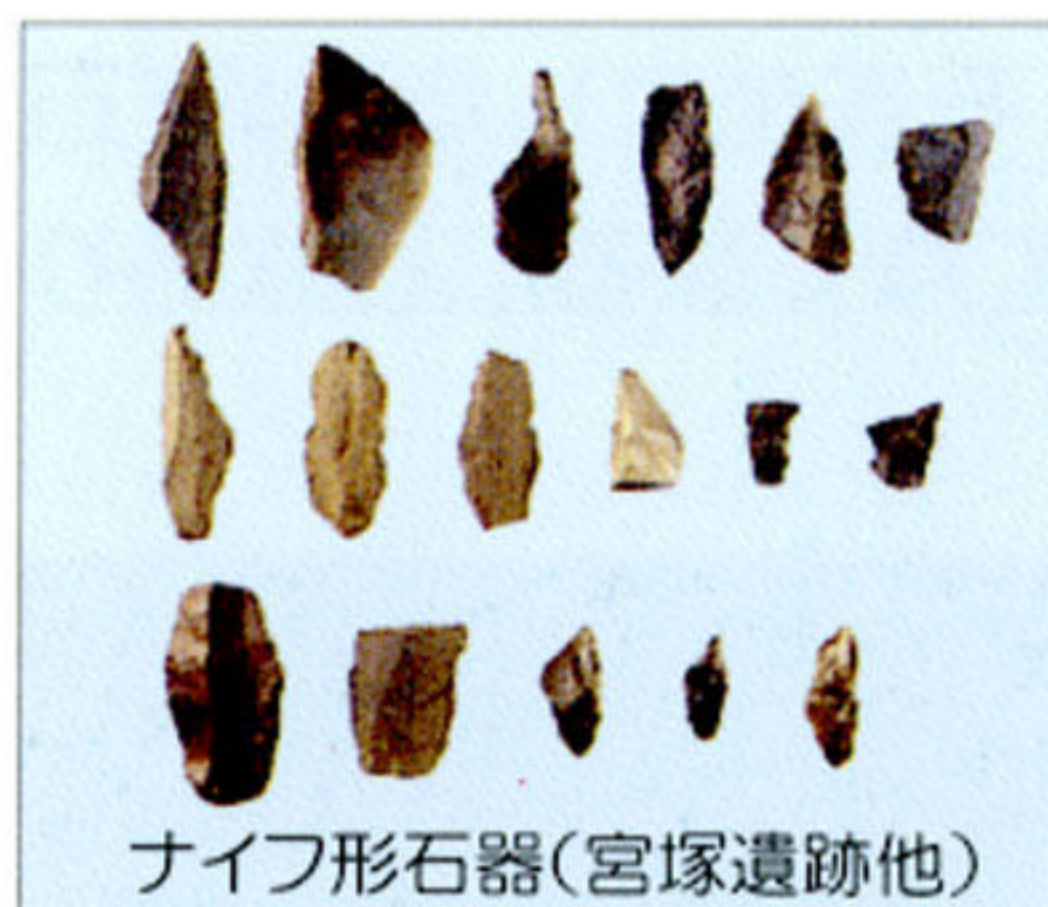
人類は道具を使います。土器の使用や、農耕を始めるずっと前から、石を加工した道具(石器)を用いて暮らしていました。石器は、どれだけの歳月が流れても朽ちてなくなることはありません。現代の私たちに、ありのままの姿を伝えています。



チンパンジーでも木の実を割るのに石を使うことが知られています。しかし、人は利器として石を加工し、目的にあった形態に仕上げて使いました。適切な石材の選択、機能を発揮するための工夫、他の素材との組み合わせ…、多くの改良や発明を経て、石器の文化は展開しました。

石器カタログ

狩猟具 動物を狩りすることは、食料はもちろん毛皮や骨格などの素材を得るために大切なことでした。離れて動く標的を仕留めるには、道具の機能と共にそれを使う技の熟練が必要だったことでしょう。



ナイフ形石器(宮塚遺跡他)



尖頭器(東島池遺跡他)



細石器(内野前遺跡)



石鏃(蘇原東山遺跡群)

ナイフ形石器は、後期旧石器時代を代表する石器です。先の尖ったものと、切り出し小刀のように刃が斜めになったものがあります。

尖頭器は、旧石器時代の終わり頃から縄文時代の初めにかけて使われました。下端が細く突き出すものを有舌尖頭器と呼びます。

細石器は、一つの石から複数の細長い石片を無駄なく剥がし取るという、高度な技術で作られたものです。旧石器時代終末期の典型的な石器です。

石鏃は、縄文時代から弥生時代に多く作られました。様々な形態があります。

ナイフ形石器・尖頭器は木製の軸の先端に装着、細石器は軸の両側に連続して埋め込まれ、投槍として機能しました。

石鏃も軸の先端に装着しますが、弓によって飛ばされました。

これら狩猟具の展開は、技術の向上とともに、環境変化による対象動物の移り変わりが深く関わっているようです。

また、漁労具として、網に付けた錘と考えられる石錘が縄文時代に多くみられます。川原石の上下端を打ち欠くなどして刻みを付け、紐で結んで固定したようです。一方、布を織るときに使った錘ではないかという説もあります。



石錘(炉畑遺跡)

工具 加工することで鋭い刃を得られる石器は、ものを切ったり削ったりする作業に大活躍しました。現在の私たちが使っている道具も、この頃から既にあつたのです。



スクレイパー(蘇原東山遺跡群)



石匙(蘇原東山遺跡群)



石錐(蘇原東山遺跡群)



打製石斧・磨製石斧(炉畑遺跡)

スクレイパーは、木などを切ったり掻き削ったりする道具です。これらは、刃の付け方の違いから削器・搔器と分類します。削器の中には、のこぎり歯のようにギザギザに加工したものがあります。旧石器時代から弥生時代まで長く愛用されました。

石匙は、スクレイパーにつまみの付いたものです。短いストラップを付けて携帯用ナイフとして使われました。これは縄文時代の石器です。

石錐は、すなわちドリルのことです。木や骨に穴を開けるための道具です。回転や揉み切りの動作で使うため先端が磨耗しているものがあります。

打製(割って作る)石斧は、鍬やスコップの刃先として使われました。磨製(磨いて作る)石斧は、木を伐採するときの斧や、割り貫いて加工するときのノミとして使われました。いずれも、旧石器時代から弥生時代に使われました。

調理具 当時の食料には、木の実や根菜類などの植物も高い比率を占めていました。特にドングリやクルミ等の堅果類は好んで食され、それを加工するための道具がたくさん確認されています。



石皿(炉畑遺跡出土)



敲石・磨石(蘇原東山遺跡群)



凹石(蘇原東山遺跡群)

石皿は、木の実を粉引きするときの石臼のようなものです。また、まな板などの調理台として利用されたことも考えられます。

敲石は、石皿の上で硬いものをコツコツ砕いたりするのに使われました。

磨石は、さらに細かく粉引きするときや、芋などと練り合わせるなど時に用います。

凹石は、二つを組み合わせて使用します。窪みを

付けたところにクルミ等を固定して上下から挟み、圧力をかけて殻を割ります。

その他の調理具として、先に紹介したスクレイパー類が、包丁や皮なめしなどの解体具としても兼用されたと考えられます。

これらの石器は、旧石器時代から弥生時代に使用された他、古墳時代以降の遺跡から確認されることもあります。

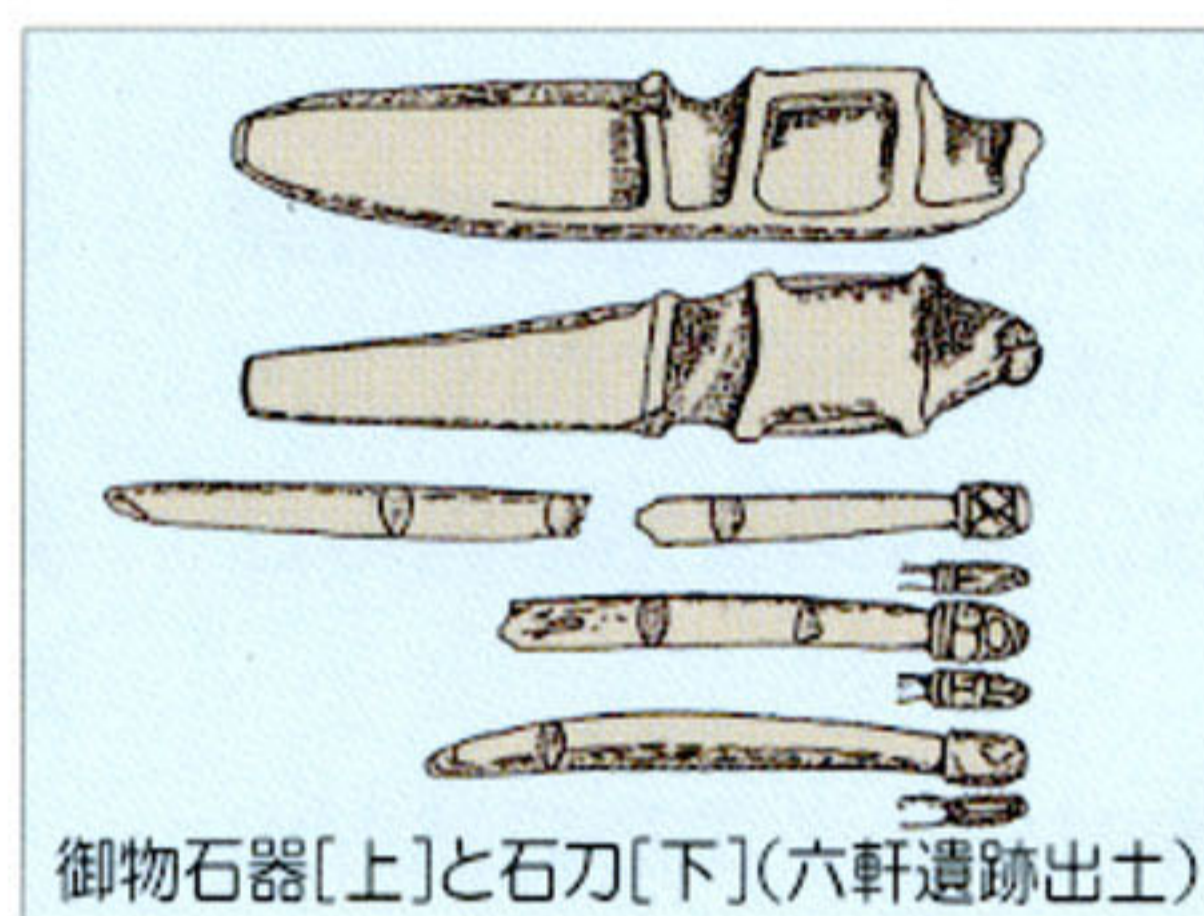
祭祀具 石器の中には、機能がわからないものがあります。また、明らかに実用のものではないと判断できるものがあります。これらは、当時の呪術・宗教世界で使用されたものと考えられます。



石棒(炉畑遺跡)



石刀(六軒遺跡出土)



御物石器[上]と石刀[下](六軒遺跡出土)



石冠(山ノ鼻遺跡出土)

ここに紹介する石器は、全て縄文時代のものです。

石棒と石冠は、安産・多産を祈る性信仰に用いられたものと考えられています。男性と女性を象徴するものとして祭られたようです。

石刀・石剣は、小型の石棒の形によく似ています。しかし、断面形をみると、石刀は片方に、石剣は両方が鋭くなっており、文字どおり刀と剣の形をしています。また、金属器が無かった縄文時代の日本に、なぜこの形が存在したのか不思議です。

御物石器は、不思議な形をしています。何をイメージしているのかは判然としません。これらと同類と思われるものに、独鈷石と呼ばれる石器などもあります。

その他、耳飾や玉類といった、装身具や小物にも、各種の石材が用いられています(石製品)。

各務原台地の石器石材の特徴

石器は、それぞれの用途に応じて石材が選ばれています。鋭利な刃を必要とする石器には、割れ口が鋭くなるガラス質の石材が好んで用いられました。各務原では、岩盤を構成しているチャート(頁岩)や、木曾川などの川原で採集できる下呂石(下呂地方を産地とする安山岩系の岩石)などが使われています。木曾川は、上流域の岩を削り取り、他にも各種石材を運び込んでおり、石器石材の宝庫とも言えます。

その他、信州産の黒曜石や奈良県と大阪府の間にある二上山のサヌカイト(流紋岩)など、遠隔地の石材も持ち込まれていることが確認されています。

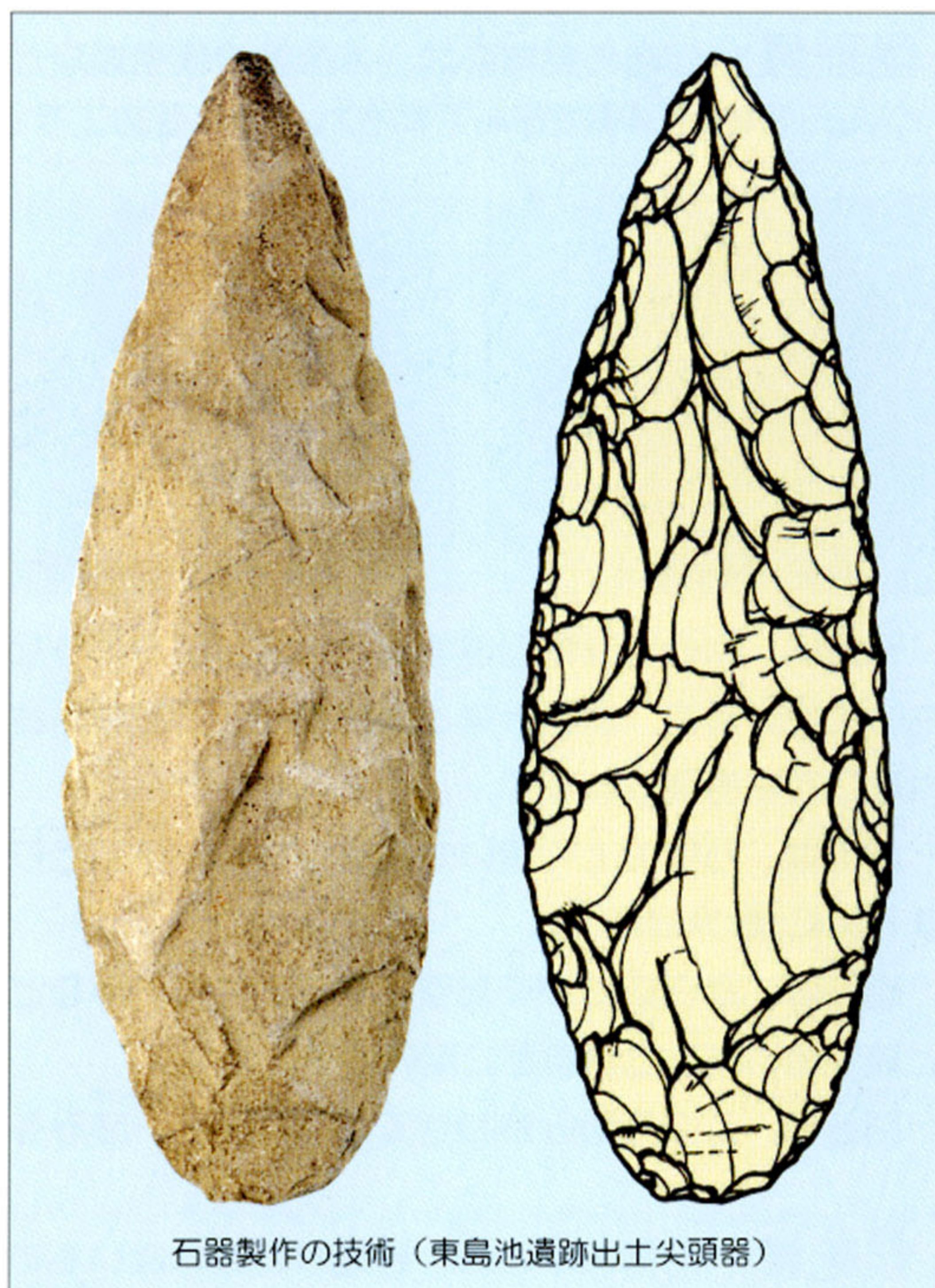
石器製作の技術

「自然の石と石器とは、どこで区別するのですか？」という質問がよくあります。石が何かの形に似ているかどうかということよりも、表面に残された加工や使用の痕跡を識別することが肝心です。

右の写真と図は、同じ尖頭器のものです。図の方は、表面の調整加工の様子を読み取ったものです。鱗のように見える単位が、1枚ずつ素材を剥ぎ取り形を整えていった痕跡（剥離面）です。

石器の大半は、石を打ち欠いて作ります。しかし、そのためには石の割れ方を熟知し、思いどおりに分割していく必要があります。石器素材は貴重なもので無駄があってはなりません。また同じ道具をいつでも誰でも作れるようにするには、割り方の順序やコツといった、一定の技法が必要になります。

遺跡からは、石器を作った時の石屑（剥片）や失敗品、材料の残り（石核）等が多数見つかります。石器研究では、これらの資料から、製作技術の復元を行うことに重点が置かれています。



石器製作の技術（東島池遺跡出土尖頭器）

石器が出土した主な遺跡

各務原市は、各務原台地とそれを取り巻く低位段丘面でおおよそ構成されています。地形の歴史は古く、早期に安定した土地では、人々の生活の営みが始まりました。

宮塚遺跡では、約18,000年前のナイフ形石器が出土しました。他の遺跡でも多く採集されています。

これらは、現在のところ各務原市最古の石器です。

その他、台地縁辺部や小河川の流域に原始遺跡が多く認められ、有名な炉畑遺跡からも、多くの石器が出土しています。

各務原台地は、濃尾平野有数の石器文化地帯といっても過言ではありません。

